牛店雑談

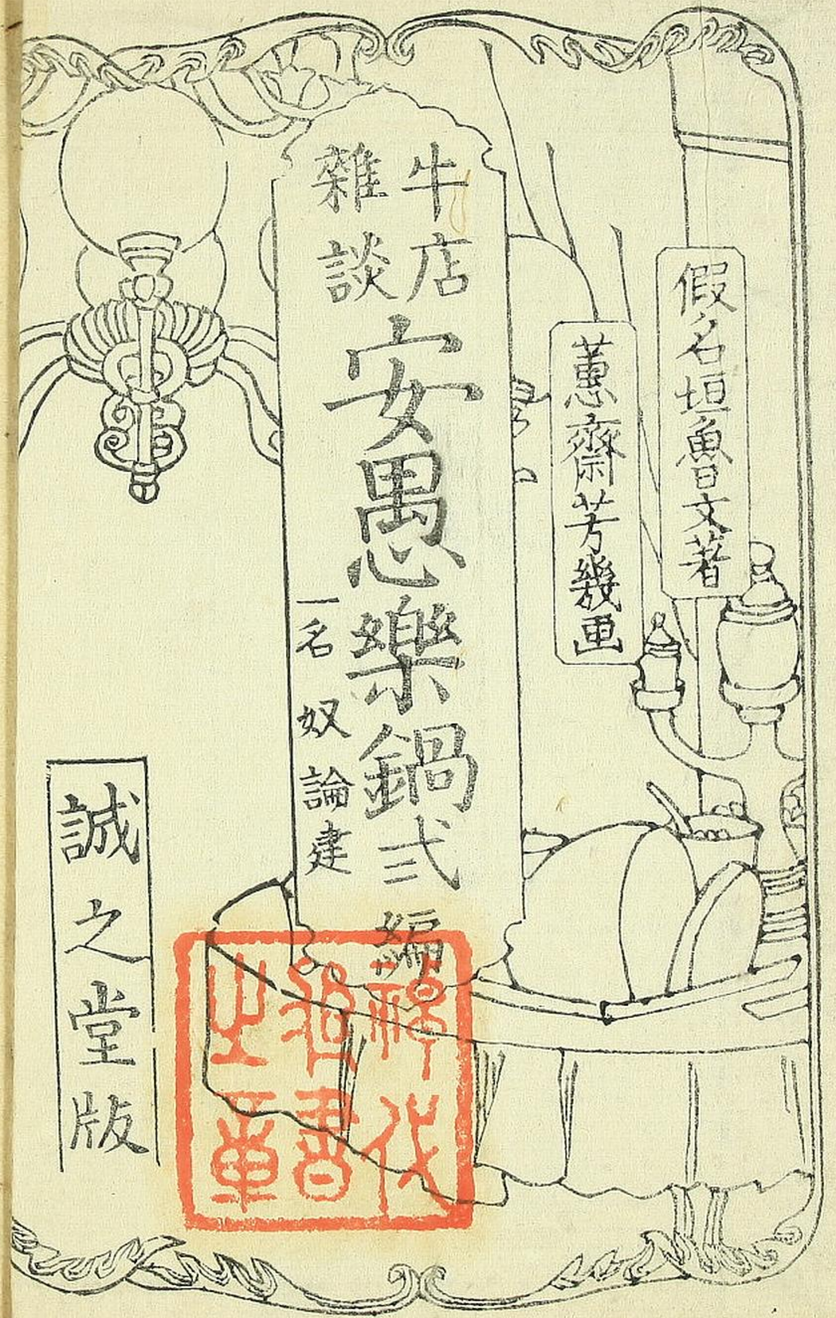
安愚樂鍋

一名奴論建

貳編

上

A 752
1



假名垣魯文著

蕙齋芳幾画

牛店雑談 安愚楽鍋 弐編

一名 奴論建

誠之堂版

神代文庫

牛店雑談 安愚楽鍋二編換序

喘を問ふ牽牛の羊を呑べる
王者も殺し。大牢の滋味。煮焼
一鍋二鍋。銅。角弋の雑炊を飽
きて。膳を乱す。各国交際

48-3754

を、汝を殺す者は、誰ぞ。魯侯

澤を邯鄲に囲む。愛妾を送

移らんとす。我衰老。嗚呼

天乎、嗟乎。

参考成孚題

西洋料理通跋　黒牡丹

鴨の脛乃短きを。鶴の脛乃長きを。割烹の

法を得。塩梅の術を盡さば。豈憂ひ

悲むことあらん哉。倩惟るに。莊周が献立

伊尹が會席は。板前の清く。俎箸法

直なるを。然に陰らぬ庖丁なれども。七五

三代ハ古風ヲ傾キ。八珍九献の當世に慨ず。今哉外國の珍客。交際乃佳宴とハ。互市ハ尽ス饗應ハ。萬里製を異ニ。ハ。飲食の設け等類ハ次。然れとも佳味の佳味ハ彼我同一ニ。傳聞。我邦未開闢ざるとき。渾沌ハ

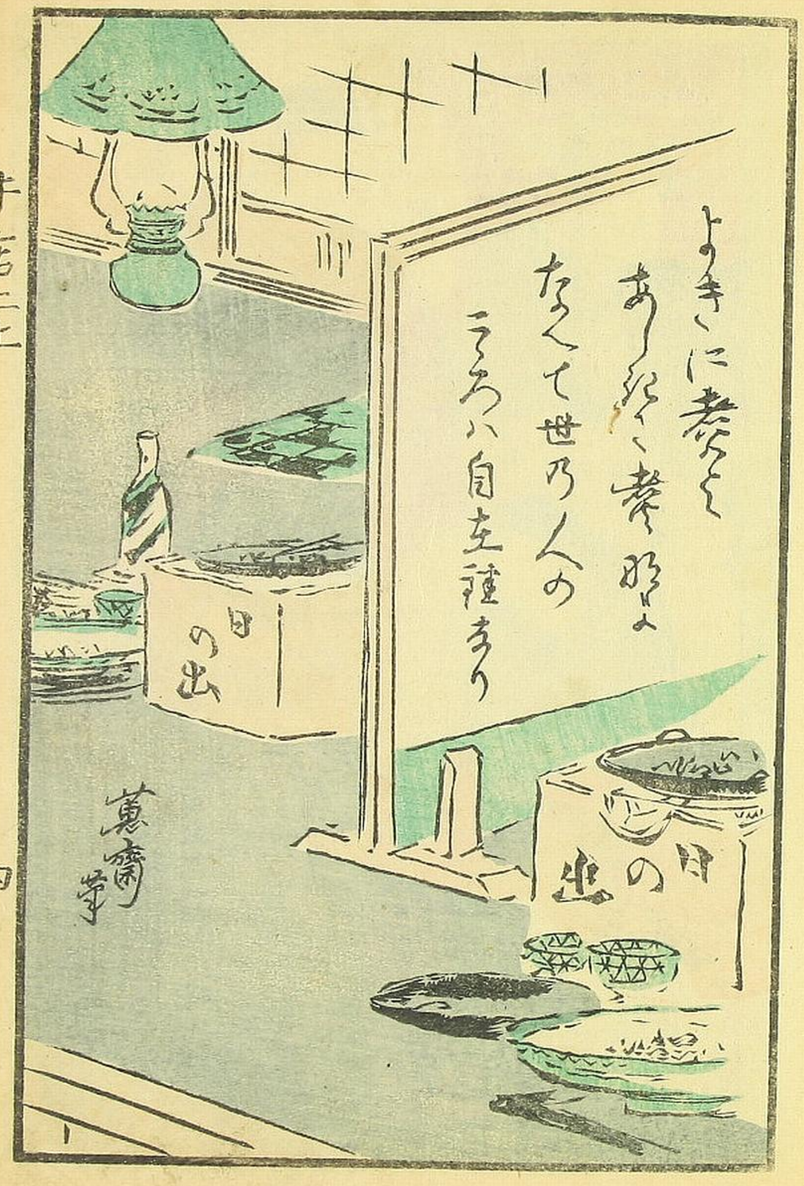
鷄の卵と。雞黄ハ。とて食とざるハ。盛運星霜を經て進。清ル露ハ美汁と。ハ。濁ル壳ハ肉種とハ。山海の珍味咄嗟ハ辨ず。精飯咽ハ煩く。美食口に飽て遠く西洋の佳味を餘遥ハ彼土の調理を学ぶ。善隣の德大ハ哉。

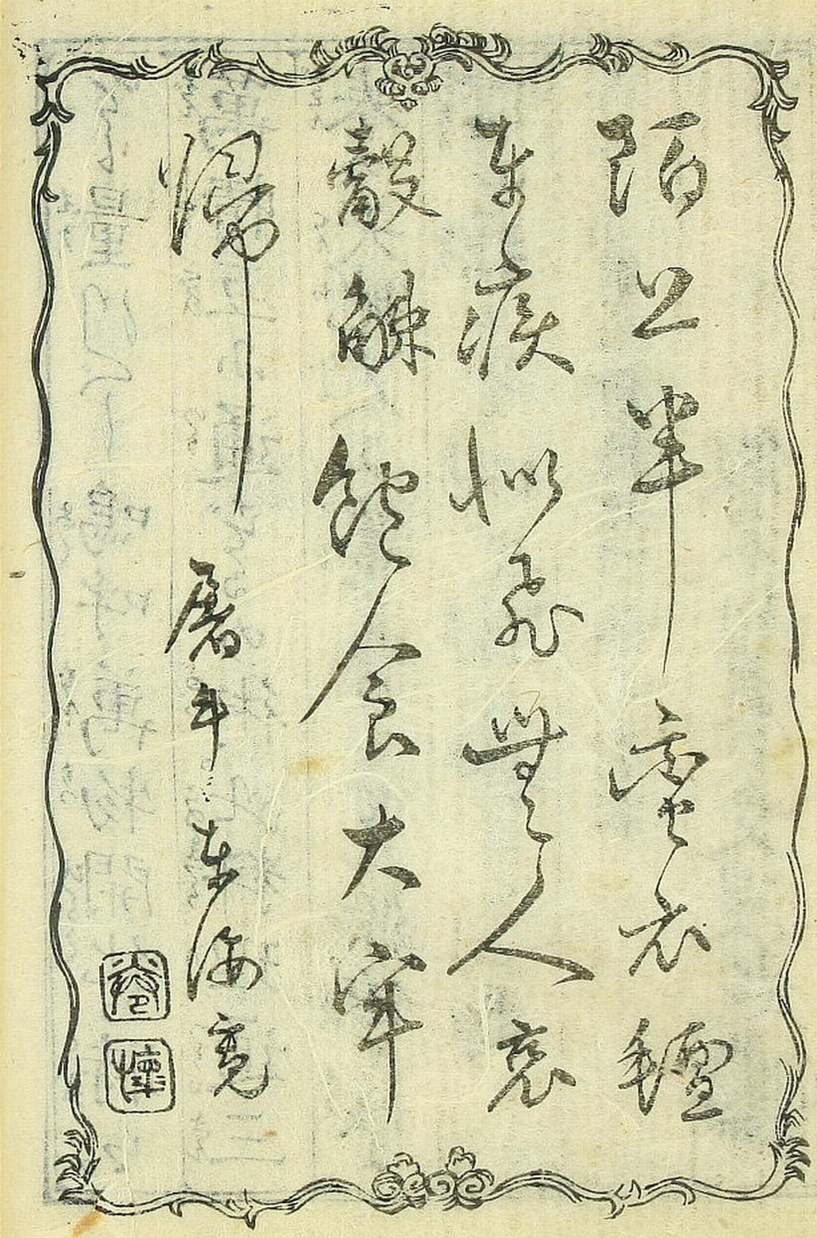
偉なる哉。さる上べ馬乘と畜ふ者ゝ。鷄豚を屠り。伐冰の家ゝ牛羊を畜む。鷄を割く牛刀を用ひ。鵞を食ふて吐出さず。時勢に従ふ新奇の膳部。ゑ機ふ乗じて調ふるに。肉箸ふ。茱魚の拳山ゝ崩さるゝ。食匙に。汁の蒼海

を量りぐし。嗚呼萬物開化の時ゝ。萬情互ふ通ずるの術。此料理通三卷の天地人に篭まうとせん欲。依て後に一口を粘して以て跋に換ると云爾。

明治新熟北門社之食客

假名垣魯文漫題


よきに奏ぞ
あらぬく奏ぞよ
なくて世乃人の
こゝろハ自左様ぞ
日の出
日の出
蕙齋堂


酒之事
なき涙抄
穀餘飯
湯
慶応大年
屠年
春面亮

牛店來客之寫眞

文明開化の人物
後ふの芸者
かぶとの女子
みんせんのこちんを
物めくさ
いんきょのさまひ
そりやのべてうさん

復古の朝臣
おとこいさん
西洋かぶれ
こちの死のあいらんちろとぬけビ
おそめの女中人力車のあひのり
こちやもずかちらとを

牛店雜論 安愚楽鍋二編上

一名 奴論建

東京市隱 假名垣魯文戯作

傳染病の新聞ホ賣弘めるる牛肉の。功能もむはしく
なるんゝと牛肉舗の主人角を折り。肉を滅ーちゝと
落ー。林涅尓孛斯土と病たる如く。豫防ぐ手術もな
かゝーに。他國へ知らぜ揭幕も。あやゝく畏き
我邦へ八百萬神達と。親類一家のよゝ。みあまべ忽地
例の神風に。吹ちらゝ晴天白日。再び盛る牛店

繁昌。別て此頃吉原と新島原乃立退ふ物ふ
花の花川戸。賑ふ人の山の宿ふ夕宵もいとゞ
泥に踏こむ田町乃素見往も復ると流行の牛肉
で杯一はく法く腹組。牛の小便十八黨。むさぶ交り
健兒の社中。文明開化のざんぎり石ふ。王政復古
乃惣髪頭因循姑息の半髪額。歌妓ゑ箱持乃
案内ふ属。娼妓い引手弦家婢にひゝの。老若男
女の差別なく。此処に一群かゝりたること。

三人ふゝ呼出し弦。揚代三十六匁。当時改平五匁 らしるふ
智恵乃割前勘定。賢藥ゝもひと經驗いもも
かふ直ゝ人力車。元地このわるまるや花川扉
ど。浮と駄洒落弦口車。ちゝんきゝ弦ホイと押出せ
ぬゆゝいあゝけと生の鍋。まゞ先さ法ハ一トきりの。
替るゝの人心所謂のぞき機關ふん欠。作者
の口調い三馬く 其ゝ序きでぞの口章
チヨンノ〳〵〳〵〳〵〳〵チヨ〳〵〳〵チヨン

○娼妓の密肉食

▲年のころ二十四五ばかりの女とろのるあたまにおすびまへ〆ごきろふいろすんろどう人のうくさいかんざし　ずれあるくまげまゆげさるごちろろ〆ばれどあまん
とろろふ〆くろとるいろいきせいらいあるこぶんのあめ〆ちりめん一ツ
おめたんいるおやふつろふねどまりいきあちぐこのうすねずこふうりゑ
のめうあうおびいとこめのゆでちやたろこのいつぷんどろことどるくまた
かろうろのろいころろをうくさんこあちやじゑのあめ〆ちりめんきのと
そでちのあらあたんてんとのくだるくひつうけうろどろびがまうり〆ゑ
ろんろんく用をすんうでまうろと〆くちやろんあてさけをあろうろそい
たるめのゆあ手作者うんがるゆうあとんゑ田町あうへうちのたるはう
うゑのあいらんまるぐ〆さのうんのういづけい山ゑふうろを仲の下のようるで〆
るれどもうろたるめくいゑせるぐきあくろく町ゑくのとびのめやたんやりの
ゆあめひつくくちあるくねんあたちうきゑ〆のろうゆきゑくのあるるゆあろう
あやあるぐふろるあ〆ゆうあるぐあげうくさ〆たるいのゆふあるるず きるるくうろのふ
ひうるたうるぐをたうど先ぎんのちうるとちのさるうげのたて〆ゑろゑゑ

いゑやす。つるやあどてのふセツやへまげたゑひとくゆのいちまいゆてるるに
ちうろうさんるんゆるくまゑやうろ一升うろとゑちやろんざけのあをツきゑ
るるろろう〆ゆろうまろろうくゆゆうるるちろあろの風るあろいのゆ
さのまちひろる田まちのちや盃へろろげろまろ〆ろうるゆちやのゆろまろる
きあめとちんちんとろうとゑきちやゆ盃の女中をつ見るでとのんねんのあるる客のろゑ
ゆ〆うてゆきあうやどゆひとまんとあうてまゆるるるるひとをいろるうるる
かろうゑちうのたるちうとふろうるるるうんゆゆ
うろの きうろうろうろをひろうきるるきあるさけとゑろう「ますとゆ」ゆるるひどん
ゆまゆくの美人ぐるゆ伊賀ゆんとゆゆ人ゆあんまろ ひけうる
ひとゆゆゆアゆいうろのせろうろるるかう義るるとう義るゆ
とうるたるひてきろのでるちゆの処へゆるろろ見るうと義ろ
かうろのまゆゆ美ゆアあるけれどせろくくとるるゆるんゆゆアヤレ

勝負を書うの祝儀へ付合ッてのうひ引をするのと
もりうう書うれうちのかうぐへ疵を付う絶交を
かもうしこと書にうづけうでゐううモウうふうねへとふ
ふうでいうものを名をきうこと書うでサ。とんど書けうでゐれうう
たづひてのきを書ヶ貌書を注うッうく中やどのふうのへあげッ
ぞるーの客人を見うふさんぐ書うきうせうあげ
句がううこんでゐうくあうまうあいうづまを家屋迫うう
ねるううとサ。うちきを書ヶあんを書へとうまを奴とうまをで

元とめうこのいあッうちを元の一件うう件の所中のひを書ぞんも
うるくうう[illegible]うづうこのうを書くいうをうまを書ッヒ自分うづ
書を書ぞう郷と定めて行てあいうてあいうて他さんをうれ
うふ書を書くうられうというを書くうを書てあうを書を書物うを援
で物含ふもでうまを書のあいを書うの処一物含で別深うう
出うくうまうとあを書の処のあうを書をんがいうてきてくまをうう
ひけてうぶうを書を書人をううていうるとやアとを書せの物城うねを注
びを書うとうをづうッうを書を書を書くをんでをんぎうのうう

ようつうじを考へぐつるうざんしてこれどあるの内のお嬢
ざーことふ初めてこどうぶとあるつて目とねむつてつと
めるとちご考つつとく考ごうをいてぶを考うちうら
ぼくであびを解イこう考つふこあうるうこヨモウく
あんなふうを人きをくいつとあふをいうをとらうとと
ありがとうへあつちゃんのことうあるを五あだろ巳
てこをろ銭裏をで訳えであひとの一組ごうふ金ご
こうをいでひろとちごとくといけをいうぶぜひく

このむとつうひとをきれこを見でアノ人なを是を変く
つ見あげくく傍ふ男をめいい小の町さんの名うふあ
どんのうの名の若ご人まで かえつくーこ処ぎ面すこのう
人あどころうを方のさんごんもでえやうを考をいい子
考ーあの人白礼合を考うぎいを考んをあるうう
きごあーうをづくふもかるごらうーまんごう
こんがでえをいとろくやうこうをうえをいを女
帝ごとあひそをつこを見るのい考を考ってぬるう

清くしと
いろ色を
お持ち
しし
妹の
新
書服
右士

西山
背隠す
扇元
あ髪ふく
いな

ぎょうぎょうしくて小の時きんかさうだんをきくとあの
ひとのふかきあり　あらんにてうどいきれめどうどうだいの
とりてとうつくおきまひきんし来もうまいこもいたのに
うらきうまひざるすうれどあの人とすぐあひおきとき
きんーらあり　あらんの身ぐうるぞうビスうぐどうぞとま
とさいきひふきまてあんきんしとうてこまこのさあきうう
つちきまアノ人ゆきぎあり　来盛ものあり　あいそをつうさ
きかぐ容いきぐぎうてきまし　に来どいの人はとうてねと

他さんまぐぐきぐぎうーてすッぞうふ敬ぐさうふ敬ぐうと
きまこくふ書くふ稽ふ（こぐうー）ぎうてもあいとげぎうと見ひとぞのの
と今さううぐうの金銀づくでまいそをつうきまるのへぎん
れんぐきうぐきうふートううてうちふさんぐんのきうまま
来ー書ものきうふあり入きまうれあいーぐどしうぐうらうと
一すのぐまふあううのヒてあげううとつうひとあへーて
物ぐ殺のまを見ひぐーてサ。ホンニぎうふしいうけぎあまぐ
賞ものあ物ぐ物ぐむんの縁をつうふうとうーどとあて

てあけあるるこそえ（伊賀）がきんぞ来ぞんーぞこのう
不図（ふと）あるひでーてぞ来（き）へのうちくいまるまくいがあひこの
むーんとうつて五あるうちッこのどまでは太さまるまく
きでのてーてぞうこ表（きうそ）の板のの熱（ねん）があるうちものぞんを様（れ）
ぞふつこあこめんぞあすうくいを（いろ）をこの音（き）ふあこく
きいだんくせうくふ通（つう）そるのでロくのふづひにも
こあうこきーめの日の生（き）ひもてのらしざを（ぎ）
あうけてのくッこうーして仲の町へもあをびふでこまる

ぞふあうく一（いちう）件あもこあふあいまるのい伊賀（いが）きんの
あうげごこうていやでくこあうあいのを情人（いろを）のうに
こうてのきんざんをョ生（き）くのこの岩人（きくじん）をこうくいこの
ぞ生（き）きいが何（ど）処の女郎（ぢろう）屋（ぢう）ぞうてあんあ志助（んすけ）のうあが
れをこうこあるのあがあうこうかけざんすをしてふぞんの
ぞうをこいあア麻風（まきーき）ぞふあ旅（ま）で（ぎまく）いふこうぞ情（えぞ）ふサ
の字（ドきざと）でサあれのあそびこうこどのかうぞのと通（つう）
がうてあるこざんをが田舎（とぎーき）の書竹（あそぶ）（ゆうのあ）（きくこいふこと）へ牛に荒（ひと）

アん残念ざんねんだヨ [illegible] エヽいけしやアつくなやけなら
うらみて東のとのやア がらくらちをの手足やア がらくくサ
まづくで五両ばかりな用をすまゐがらをでまなアがらく
かりしやくにさらつてふれつけてくらうと思ッたれど
まなぶの奥へもあららふ出してゐてあ来ろがとまる
うるもしくがそをめつてかへッちやアまうえきるツざッ
ぢヨヲなんぞエおまねどんおそくなるとエヽてまゐやア
あいらおそく おやまやア人力車がなるうちびくおしで

あヽヨと遠くから かへッてから田舎の先まで川へいつて
正業らんの武中ゑんをよびにやつて のきそばを
まあそらなんぞエ ひらけ桜の錦つるがいくとエうともやまやア
ひらかまつや きんつるがせうまく なるこざんす オホヽヽ
とまあみなうがある田舎もりれぬとふてかえへでう サア めらいつぞいこのちやこんでおあがりヨ
あふのあるのとエ。そいやまらひもおかめのむすらおかの
ひやでものくらモウ一本 そうして生で らべてのざんまてら
らすくきつくのをつきびまするもをつけてサアそやく

いひけてあるんなんにそ考ろうと人を尊くふさろるようひ

○半可の江湖談

▲ひとごろ三十四五あるいはけひと人ありあるんなんのうれ世を考へ考へさぶりをしくそろくちぐーめられ
ものるのいつくあり考りのとてらくいのちくろるさいを面めんふ思ひ
てらくくいのず考ろさるるろくくさろくくあくとれも一社二人つれ考り
只モシ爰先生当国の邪弊ハあひくひふけてきもしろぐ
高法外一の世界ふるろくろ外づれのるのけ若い癖
さるるろけご子ろくぐへふ薄語遍ふ国術家ごとろ舊
弊家ごとろいるるのごろ大きにやろうにあるれて

きゃ〜ろぐふろにざんぎろふもるまず洋ふくの
さんごんもでれねくろ考髪あるとろれてゐるのぐ
考ろふろろいとあるくふもろるぐせふくゆろごョろるふろ拍
ろ〜さろふ洋中で法ッ〜幅幅今をつれろろもめりゆす
の筒袍をそごにろく一六日ふ〜ちのれをひゆすのも
あるり拙きろけごろふきのいろと大ひひり砌ごろふで
遶へるつるいろれそといふふ法討所の崖倭ョウレ河岸の
生ゃゃサ彼い図南の門人で書体も可ありにでれやス

流行のさうあうふ男四人彼人と倶ふ彩羅をつくとんで河岸へひつてきて大八車へ「フランケット」を敷きうつて是へあひのりときめて車力あ人をやとひこをのあしーごすつこをろいろ走へ通ふ人力車の性ザ者るサ用ぎるーい中へ。ヘニサカホイでひたぶるに世間信家の信物めらがあどろたりくの木さん者よの木あぎる男ふを耳目に重老大通りとる宿町へかつて意店うふ走へまろう横山町を直路ふ本町室町うふくうろるのヨが日本橋夫ふ

記あり一八所牛の小俵ごろくきつふ狭屋兄抱あと
きりいせひ南品といふところを連ふひうれて会ろりに吸
宅サどうごこうやア近江のひねりごらうトキニ形年家が
行いをもやア天ぷらのうまにつうとことがありさうあん
ぐをとまでみやアいうぐうねくがとうやアきつと寄姫ごョ
てんぷらといやア出揚の屋夫が数人ふあつこさうごぐ
れも京京の宿掛めめごを〜きるくと死ちりてこそも
といふられどくをまでいを〜むゆるあるうある人ぶつサ

三歩嘗いふ行塩で時百挽人油のう森と田町の漢
屋ふ寄宿をのヒ粒云い浅吉流で四富仁寄つの座弟
あるふ見いとのあうにうれるあい〜清元いお玉ぶ沈か
岩衣第壺焼一中岸ふ鞘蓑の名芳前り石切じの
見生老人とおまのあぶらの烟ふ生紀久保町の寄賛
屋うう宵年所の義水子ゆでとろうの粉でう紀き
いうこも除いあうくのうで兼サ子うでとい夢寄こ寄
の活人形があひく裏数がそろふが被奴い当世の花う

甚五郎ゴ子人数を召連れ極楽非ゴ細工ふみち事
あるらく日本一でゴらう日本一でゴらう日本一ゴ家系
中の宝をあつめらく海道筋の名山で悟覚金を出す
はりゴらうそのとれ世とみんにあつらく色ろとふ物
様岳先生と手紙雷先生ふこの手色ゴイヤ去る
やうれの地つれもあめのてあいが絵ちゃアあひく
けてあるらうゴらうナヤあめへゴらい先生を去ら
れくうリレ家先姫の小屋流波とふろうりのヨ

みんゴ名ロイサ業ゴとがう世いあり一ろ味がるのウフレ
あるくの酒合ッとらう横山町の大又ヨ彼奴が通ゴさろ
この間様で蹴鞠の兄世地と閑絶して金ろこそけちし
た清蜜ゴあるヨ出方のものゴ教者のまあてもれくろ
大又とさいそしてろう鞠番とうんまのまくてゴうゴビて
提灯してもゴこのハ番でもろくくといふまでごといろこのハ
大ろうひのとと色ゴあアれくろと色といやアふさんゴうと
ろ面でおろくくと改名しくとろうあと木のせいぐ

書海宗伴法印とふの外歌を出し女拍子汀まで色
小倍彩書の倍とそ色とそうが五百六百づまいもんの
大入で宝入ご者ろうあとろとちがふとそとろ
浦安ふまって者る浦家敷一所拍のむごるをもあ
とんで面でおろういろ者れく鏡ざくと鏡が発生
門ろみやげとのろく吸ッさやうに来系一来く
不のめろしてゐるあとろとろそのの後家どのが遊ッ
うけてきくろちろそんまは用ふあつくろイ

魅拝であちふまくち色の市がさくきろろが
イヤ世の中とそろすとさるぐるる彩写がある
めご子ダがの自己ご見人やろうとろうがちゃア
戦猿者や狂言俳者るこのそうる彩案ご行るの
ご世一脱日地門の河外が来てきんぞ彩きやどんの
たくふふるる色しわくうと買ゆーふ来るとふひるを人
そのあとろうすん所の書文が西洋栗毛のるみにたる
あんせつがるるるふきろしそんれとうてそるこうとる数の

浦板屋うら毎日ぢんぶんとさいそくふるしあんまう
せうんと悩くせんさくぐそとまるとヤレ悩徹うあ
鍋うどのとうへまくうるさうろくまうねくぜヲイくあ
先生コレサあまふだろうあぐらして粘にハどうするのど
ナヽヲヤくねねまりう酒ハつりふしてめーにあまうぜ
コレサぢんぢうあずふモウいろぺあやうしねくヲイねくさん
酒と牛肉のううどく
安愚樂鍋二編上了

010190522852